



11月の平和祈念式（リモート開催）は、3年生の松尾先生による「カラスザンショウ」と「双子グス」についてのお話でした。

以下が、その概要です。

- 1945年8月9日、原子爆弾の炸裂により、城山小の樹木のほとんどが焼け落ちてしまった。城山小は爆心地から500mしか離れていなかったため、当時、九州一と言われていた頑丈でモダンな鉄筋コンクリートの校舎も、一瞬のうちに破壊された。
- ほとんどの樹木が倒れ、焼けてしまった中、カラスザンショウは生き残った。しかし、原子爆弾の威力はすさまじく、生き残ってはいても、幹全体の皮ははがれ落ち、今にも倒れそうな状態だった。
- 人々は、そんなカラスザンショウに支柱をした。カラスザンショウを支えたのは支柱だけではなく、隣のムクノキもであった。ムクノキが、今にも倒れそうなカラスザンショウを支え、共に生きてきた。そして、その生命力は、見る人に勇気を与えてきた。
- そんなカラスザンショウであったが、2016年の大雪で枯れてしまった。多くの人が悲しみ、その姿を残してほしいと訴え、その声を受けてカラスザンショウは保存処理をされ、その場所でその姿をとどめてきた。
- 大切にされてきたカラスザンショウであるが、年々傷みがひどくなり、その姿を維持することが難しくなった。そのため、2021年7月に、薬を塗ったり殺菌処理をしたりしたうえで、平和祈念館に移設されることになった。現在は、祈念館内に展示中である。
- 「双子グス」は、原爆落下前は1本のクスノキだった。しかし、原爆で燃えた後に新しい芽が伸びて、二股に分かれて成長した。その形から「双子グス」と呼ばれている。
- 死んでしまったと思われたクスノキから二つの新芽が伸び、大きく成長していく様子は、被爆した人の心を励ましてきた。
- 原爆が落とされて76年たった今でも、双子グスは必死に生き続け、その姿を残している。

この二つの木が、私たちに教えてくれるもの。その一つは、【支え合って生きていくことの大切さ】である。カラスザンショウは、ムクノキやたくさんの人たちの支えで、長い間生き続けることができた。

もう一つは、【強い生命力をもって生きてほしい】ということ。皮1枚の状態でありながらも生きてきた、死んでしまったと思われたのに新芽が伸びてたくましい大樹に成長した。

これらの木が伝えることを胸に、これからも城山小学校の子どもとして、平和を願う気持ちを誰よりも強く持ち続けてほしい。

